

# 以訪談探討台灣中等學校高中日語教師的教學能力

林長河

銘傳大學 應用日語學系教授

## 摘要

本文訪談九位高中日語教師，藉以探討高中日語教師的教學能力，其結果將回饋到研究所的教學上，藉以培養更適當的日語教師預備軍。

首先分析大學的師資培育流程，接著整理訪談內容，進而加以考察得到 8 項結果如下：1. 從教師的教學法的學習過程，看出專業教育的重要性。2. 重視日語的結構和意義。3. 教育目標傾向升學與通過日語能力測驗。4. 有效的教學法是結合生活與喜愛話題的內容。5. 中高級指導是瓶頸。6. 一般職涯能力很重要 7. 高中現場教學與養成機構的內容存有落差。8. 教師工作有成就感但對培育師資後能否就業有些許不安。最後並提出六點建言。1. 教學法演習課程應該強化。2. 結構與意義的強化。3. 研究生日語能力的強化。4. JLPT 的理解與強化。5. 研究所與高中應該加強聯繫。6. 一般職涯能力很重要。

關鍵詞：高中日語，師資培育，教學能力，職涯能力，建言

受理日期：2013.03.11

通過日期：2013.05.24

# **A Study of the Teaching Competence of Senior High School Japanese Teachers in Taiwan through Interviews**

Chang-Ho,Lin

Professor, Department of Applied Japanese, Ming Chuan University

## **Abstract**

This study interviewed 9 senior high school Japanese teachers to explore their teaching competence. The results will be fed back as references for the teaching in graduate schools, to cultivate more appropriate reserve Japanese teachers.

First, the teacher cultivation processes in universities were analyzed. Then the contents of the interviews were concluded as below: (1) the importance of professional education can be found in the learning processes of teachers' teaching methods; (2) more importance is placed on structures and meanings of Japanese; (3) teaching goals tend to be helping students enter higher schools and pass proficiency tests; (4) effective teaching methods are those can relate daily lives or things students care about; (5) the bottleneck is the medium/high level guidance; (6) general career abilities are very important; (7) there are differences between senior high schools and cultivation institutions in contents taught; and (8) teachers have sense of achievements at work while feeling unsecured regarding employment after teacher education. Finally, this study suggested to improve: (1) courses of practicing teaching methods; (2) focuses on placed on structures and meanings; (3) graduate students' Japanese competence; (4) understanding of JLPT; (5) connections between graduate schools and senior high schools; and (6) emphases on general career abilities.

Key words: senior high school Japanese, teacher education, teaching competence, career ability, suggestion

# 台湾中等教育における日本語教師の教授能力 —高校教師のインタビューを通して—

林長河

銘傳大学応用日本語学科教授

## 要旨

本稿は高校教師9人へのインタビューを通して、中等教育における日本語教師の教授能力について理解しようとするものである。その結果を大学院の教育にフィードバックし、日本語教師養成に役立てたい。

まず、大学での日本語教師養成の流れを紹介し、次にインタビューの内容をまとめ、考察を行った。その内容は次の8点である。①高校教師が習得した教授法の時空から実証された専門教育の大切さ、②構造と意味の理解を重視する傾向、③進学と JLPT の試験に傾く教育目標、④日常生活と好み話題が有効な学習法、⑤中上級指導の限界、⑥一般的なキャリア能力の大切さ、⑦現場と養成機関とのギャップ、⑧仕事の満足感と生き甲斐を持ちながらの教師養成への懸念。

提言は以下の6点である。①演習授業での教授法のインプットの強化、②日本語の構造と意味の教育の強化、③院生の日本語力の強化、④JLPT の理解と指導の強化、⑤一般的なキャリア能力の強化、⑥応用段階の理解と強化。

キーワード：高校の日本語、教師養成、教授能力、キャリア能力、提言

# 台湾中等教育における日本語教師の教授能力 —高校教師のインタビューを通して—

林長河

銘傳大学応用日本語学科教授

## 1. はじめに

2009 年の日本交流協会の調査によると、台湾における日本語学習者は 247,641 人で、世界で 5 位である<sup>1</sup>。その内訳を見ると、高等教育機関の学習者数が 119,898 人で半数近い 49%を占め、中等教育 79,579 人 (32%)<sup>2</sup>、社会人機関 48,164 人 (19%) となっている。前回の調査 (2006 年) と比べて中等教育機関における学習者数は 22.8%も成長しており、高等教育機関の方は僅か 2.4%しか伸びていない。つまり、高等教育機関の学習者数の増加は頭打ちの状況にあることが分かった。この先の発展を図るには、学習者が次第に減少する傾向にある高等教育に対策を講じながら、増加中の中等教育にも力を入れて、台湾全体の日本語教育の裾野を広げた方が賢明であろう。

発展を図る鍵は、日本語教師が握っていると言っても、あながち言い過ぎではない。中等教育の中で、特に高校・高職(以下、高校)の日本語学科が多いため、現役の教師は言うまでもなく、高校の日本語教育に携わる教師の予備軍にも関心を寄せるべきである。就職の観点から見れば、現役の高校教師が測れ知れないほどの重要な役目を担っている。なぜなら、現実として、教師たちは教育現場の事情を最も理解しているばかりではなく、教師の新規採用があるとなれば、採用不採用に立ち入り、所信した価値観や教育観などを以って、最終結果を左右する影響力を手に行っているからである。

実例として、筆者はある機会に恵まれ、某国立高校の求人活動に当たる模擬授業に参加したことがある。3人の審査員がいたが、大学教員の筆者を除けば、その他の2人は高校のベテラン教師であった。ちなみに、私立校なら、審査員が全員所属校の教員だったと応募者から聞いている。こうして、現場の教師が、

---

<sup>1</sup> 2009 年国際交流基金の調査では、世界における日本語学習者数第一位は、韓国、次は中国、インドネシア、オーストラリアの順で、台湾は 5 位となっている。

<sup>2</sup> 世界で中等教育の日本語学習者が最も多く、53.5%を占めている。

実際の教育に携わりながら、新規採用の求人活動にも深く関わっていることは、否めない事実である。大学院の教師養成教育は、就職先にある現実とニーズを避けて通れるであろうか。

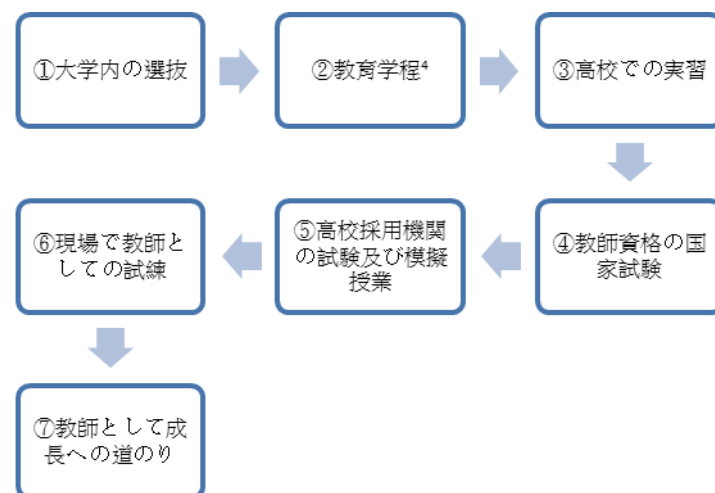
なお、高校の日本語教育では、教師たちは、高校生の教育や、生活と進学の指導に腐心する日々であり、彼らに時間を割いて実践した教育について発信してもらおうと期待するのは非現実的な考えである。それゆえ、教育事情が不透明になってもむしろ当たり前のことかもしれない。だが、実際どのような教育が行われており、どのような内容が望まれているのか、それを浮き彫りにできれば、日本語教師養成機関にとって、さぞ貴重なデータになるに違いない。特に現場教師の視点から見た中等教育の日本語教育は、どのような教授能力が必要なのか、どのような課題が現場に存在しているのかをより明白にすることが可能になれば、大学院の教師養成教育に多くの示唆を与えることができるであろう。

林(2011)の調査によれば、中等教育(主に高校)の教師養成を目標に掲げる日本語学科、及び大学院は多々あるにもかかわらず、カリキュラムに日本語教育に関する専門科目を扱っている所は少ない。従来、教師養成に意欲的な姿勢を持つ機関では、シラバスや指導法について自ら暗中模索をしながら、試行錯誤を繰り返しているのが現状である。

したがって、中等教育の日本語教師を育成するに当たり、現場の実情を把握し、どんな教授能力が必要とされるのか、第一線にいる教師からのニーズや提言も取り入れ、それを酌み入れて、養成教育の参考にする必要がある。「教授能力」とは、一般的に言えば、狭義的に言語の教授法を扱う能力とするのが普通であるが、ここでは、教授法の他に、中等教育の教師として、職務を遂行するのに必要とされる様々なキャリア能力も含め、広義的にそれをとらえ、定義をしたい。よって、拙稿では、中等教育においてキャリアのある日本語教師を対象に、訪問インタビューを行い、現場での事情とニーズを明らかにし、教授能力を理解した上、その結果を大学院の日本語教師養成にフィードバックすることを目的としたい。

## 2. 中等教育における日本語教師養成の流れ

長年、台湾の日本語教育に携わってきた交流協会の専門家であった原田洋教授が、台湾の教師採用を単刀直入に、高等教育は学歴(修士・博士)、中等教育は資格(ライセンス)、補習班教育(社会教育)は能力が重視されると指摘している。中らずと雖も遠からずの観察である。中等教育<sup>3</sup>の教師養成は、確かに台湾の教育部(日本の文科省に当たる)では、その資格に神経を尖らせている。教師の資格を手に入れることは、決して容易なことではない。拙稿で実施するインタビューの対象である中等教育における日本語教師は、一体どのようなプロセスで養成されてきたか、また、インタビューの中で、絶えず、教師養成の話が話題の中に出てくるため、中等教育の日本語教師たちは、どのような流れで養成されてきたか、その詳細をここで紹介しておく必要がある。以下、図1のようにそれをまとめてみる。



【図1：高校教師養成の流れ図】

大体、大雑把に言えば、最後の2段階は、一人の教師として生涯をかけて、自己成長を求めていくプロセスであるのに対して、前の5段階は、それぞれの狭き門を通ることにより、教師資格を入手していく関所でもある。以下、各段

<sup>3</sup> 中等教育は中学校と高校に分けられるが、中学校では、ほとんど日本語教育が行われていないので、本論でいう中等教育は高校(一般高校と職業高校)を指している。

<sup>4</sup> 大学に付属する。設備と教員、募集人数などは、管轄機関である教育部がその指導と認定をする。近年、機関数と募集人数は減少する傾向にある。

階について述べてみる。

まず、①は、第一段階として、教育部の認可を受けた「(中等教師)師資培育中心(教師養成センター)」という特許機関が設けられた大学の中で、参加者を公募する。学部と大学院を含めて、公募の規定条件を満たした学生を募集対象とするが、その内訳は、次のような内容である。専門科目と品行の両方とも一定した成績に達していなければ、教職課程の受験資格を認めてもらえない。銘傳大学(以下、銘傳大)を例にして説明すると、全校で 180,00 人の学生がいるが、一年間の学業成績を有することが資格条件なので、学部、修士課程、博士課程の二回生以上の 13,500 人の学生が募集対象となる。条件として、品行成績 80 点以上が必須条件の一つで、その上、学業平均成績が 80 点以上か、在籍クラスでの成績が前半 50%に達した者を参加資格の最低ラインとしている。

その上で、適性を見る面接試験に合格しなければ履修資格を得られない。試験の内容は、一般的教育知識 30%、教育理念 30%、表現能力・マナー、態度、教育スピリット (spirit) など 40%という配点である<sup>5</sup>。ちなみに、最終的に合格して、「中等学校教師教育學程(以下、教育學程)」に参加した学生数は、2010 年が 104 名、2011 年が 102 名であった。参加者がおのこの領域別に、中等教師としての専門科目を勉強することになる。教育部に規定された教職としての専門科目は、必修 14 単位と選択 12 単位で、併せて計 26 単位以上を取ることになる。そのカリキュラムは付録 1【銘傳大学中等学校教師師資職前教育課程教育專業科目及学分一覽表】の通りである。

さらに、それぞれの職種によって学部の専門科目が規定されており、その単位を履修しなければ、資格を満たさないと見なされる。一般高校の第 2 外国語の日本語教師と職業高校の日本語教師の二種類がある。種類により、認定科目が異なるほか、大学によって教育部に申請し許可を得た履修科目も一致していない。銘傳大応用日本語学科の場合は、付録 2：【高級中等学校第二外語一曰文科:必修 36 単位、選択 14 単位、計 50 単位】と付録 3：【高級中等学校職業群科外語群一応用外語科日語組:必修 9 単位、選択 17 単位、計 26 単位】のようになっている。詳しい内容は付録 1、付録 2、付録 3 を参照されたい。就職のチャンスを増やすため、たいてい「第二外語一曰文科」と「職業群科外語群

---

<sup>5</sup> 「銘傳大學學生申請修習中等學校教師教育學程口試簡則第四條」による。

一応用外語科日文組」の両方とも、履修するのが普通である。

続いて、段階の③は、銘傳大と契約を交わした高校で、教鞭をとっている正教師の指導を受け、半年の実習を行うのが必須条件となっている。終了時、実習生は、実習機関から合格不合格の判定を下される。合格という認定を得られれば、「実習合格認定書」を授与される。それから、④は中等教師の資格を取る国家試験のチャレンジであるが、これも難関の一つになり、パスできなければ、今までの努力は水の泡になる。ちなみに、2011年と2012年の全国の合格率は、平均して約6割程度である。国家試験に合格した時点で「准教師」の資格を獲得したと言えよう。

「万事備われど、ただ東風を欠く」という言葉のように、就職における最後の一マイルは、正に高校の正教師の職を射止める試験である。⑤で示したように、公私立の中等教育機関では、教師の空きが出た時、教師募集の情報を掲載し、公募する。これが「准教師」達にとって、正式に教師職を得る貴重な機会になる。ただし、一校に僅か一人か、二人ぐらいの採用枠しかないのに、多くの場合、二桁以上の競争者が参加するため、成功率は僅か数%の激しい就職競争となる。その公募試験<sup>6</sup>（筆記試験、模擬授業、面接試験）を勝ち抜いた者がようやく正式に教師になれる。

就職における最後の一マイルに辿り付けば、今までのすべての苦労は報われるかもしれないが、途中で失敗したら、撤退か或いは継続かの選択をせざるを得ない。継続を選ぶなら、次回の機会を待たねばならない。精神的にも肉体的にも、大きな試練である。性格的には、挫けず、タフな性格の持ち主でなければならない。これが至難な関門である。もし勝利の女神の微笑みに恵まれるなら、⑥の段階に入ってくる。第6段階は、仕事を獲得した幸せな者として一安心して職場に臨んでも、現場にはそれなりの厳しい挑戦が待ち伏せている。

せっかく手にした仕事に慣れるように、暗中模索していかなければならない。ついに慣れることができず、放棄する場合もある。生き残れるか否かの試練期間は

---

<sup>6</sup> 人数によって、やり方が異なる。申し込み者が多い場合、まず、筆記試験を行い、その中から優秀者を選び出し、模擬授業と面接試験を実施する。少ない場合、筆記試験を省略する場合もある。



最初の3年間と見る。つまり、日本語教師として教壇に立ち、現場で試練を受けながら、難関を乗り越えていかねばならない。それを途中で諦めず5年間ばかり勤務し続ければ、安定期に入ると見てよかろう。最終段階の⑦は、落ち着いて、日本語教師として生涯をかけて成長を求めていく段階である。

このように、高校の日本語教師という職を獲得するのは、茨の道とまではいかなくとも、決して容易なことではない。日本語教師という職業に対する強い情熱と執念なくして、いくつもの厳しい試練と難関を乗り越え、大成できるものではない。

### 3. 先行研究

台湾における日本語教師の養成に関する考察は、次第に為されつつあるが、まだそれほど多くはない。蔡(1985)、陳(1993)、顔・渡部・小林・縫部(2007) 頼(2011)、林(2011b)、呂(2012)などがある。最初にプロの日本語教師を養成する必要があると強く主張したのは、台湾日本語教育の先駆者である日本語教師の蔡茂豊先生である。東呉大学日本語学科の大学院を設置したときに、そういう趣旨で発足したことを蔡(1985)の中で明言している。

蔡(1985)は、大学や専科学校において、日本語の履修者が多いにもかかわらず、適格な日本語教師が少ないため、高い学習効果を上げることができずと指摘し、日本語教師養成の必要性があると指摘した。この指摘は、今ではもっともだと思われるかもしれないが、日本語ができれば教えられると考えられていた、日本語教育の専門性が世間にあまり認識されていない時代においては、正に先見の明があったと言える。その上で、台湾における日本語教師養成に欠かせない課目として、一般言語学、日本言語学、日本文学、日本文化論、日本語教育文献資料講読、日本語教授法、日中比較語学、教学実習などの課目を取り上げた<sup>7</sup>。具体的かつ先駆的なカリキュラム・デザインと言って過言ではない。

その6年後に教師養成に関わる具体的な実践例の試みが誕生した。陳(1993)である。陳(1993)は、1991年9月～1992年5月の間に(80学年度に当たる)、

---

<sup>7</sup> 蔡(1985)P.74。

勤務する東呉大学日本語学科の「日本語教授法コース」という課目で、社会人を対象に、学部生の教壇実習を取り入れ、それを試みた実践報告である。

学部生は日本語能力が十分備わっているとは言えないが、最初の試みなので、目標の設置などの課題を抱えながらも、貴重な実践例を残した。報告によると、学習者のニーズが事前調査で明らかになったように、会話志向であるにもかかわらず、会話向きのクラス活動の授業形態は如何なるものか、把握できないまま授業に臨んだ実習生が多かったという。そのような反省により、自己研修の基盤に成れば、と期待する一方、実習先の確保、教室の指導技術の開発、自己研鑽型の教師の育成、といった課題があると指摘している。

顔・渡部・小林・縫部（2007）は、633名の台湾人大学生を対象として調査を行い、次のような四つの因子を得た。①学習者の配慮、②専門家としての教職歴、③日本語教師の専門性、④インターアクションへの配慮、である。なお、ここから、優れた日本語教師の行動特性は、「①学習者の状況に合わせて配慮できること、②有資格者で教職歴を積んでいること、③日本語教師としての専門性が高いこと、④学習者とのインターアクション能力が高いこと」<sup>8</sup>としている。理想の教師や優れた教師を求める調査であった。

頼(2011)は、台湾における日本語教師に関して、東呉大学の例を取り上げ、大学での日本語教師養成のプロセスを紹介した。異文化交流を最終目的にする位置付けの日本語教育において、理想的な日本語教師に求められる条件として、①学習者を優先する思考様式、②日本語力、学習者の母国語力、③日本文化、学習者の母文化への理解力、④教育学専門能力、⑤教材の選定力、編纂力、⑥教師として自己反省力、⑦日本語教育の発展への関心などの7点を持つことが必要だと指摘している。<sup>9</sup>

林(2011b)は、台湾の大学院では、実務的な課目が稀であるが、銘傳大の大学院に「日語教学法実習」という実務的志向の演習授業が設けられ、長年、院生の模擬授業が実施されているので、その教室活動に焦点を当てて、その流れと課題を探るといった内容である。教授法は言うまでもなく、その応用に力を

---

<sup>8</sup> 顔・渡部・小林・縫部(2007)P.71。

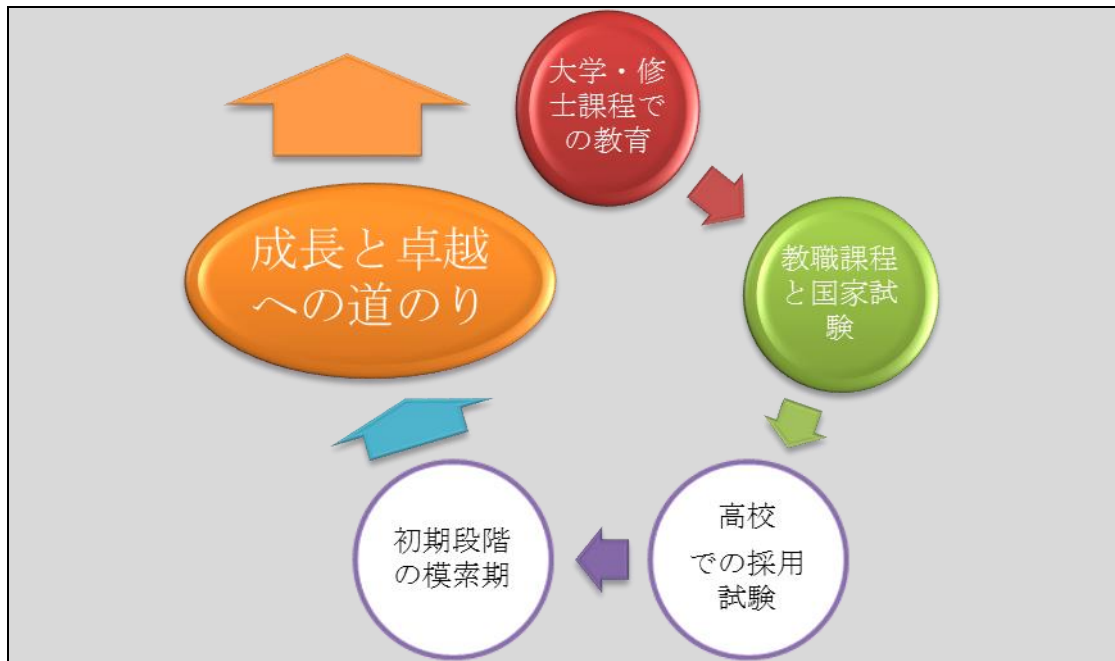
<sup>9</sup> 頼(2011)P.74。

尽くしているが、教育の実践においては、経営学で使用する PDCA サイクル、OJT 体験学習などの方法を参考にして試みをしている。

呂(2012)は、銘傳大応用日本語学科のカリキュラムにある「日語教学法」という課目のコースデザインを試みている。日本語教師養成の専門科目のため、内容と言語の統合を配慮し、「理論+応用」「専門+日本語」といった専門科目の教育のあり方を酌みいれ、コース・デザインが行われた。特に CALL の運用、実際の模擬授業の授業活動などが、理想と現実のギャップまで考慮した点では、ユニークで、参考になる試みである。

以上、蔡(1985)は日本語教師養成の必要性を喚起する役割を果たした。顔・他(2007)は優れた教師の調査であった。頼(2011)は、現役教師にプロセスを示し、卓越のモデルを提示した。陳(1993)、林(2011b)、呂(2012)は、学部や大学院の教育における日本語教師の卵に対しての、具体的な実践教育の試みである。異なりが存在しているが、いずれも教育現場に示唆を与えた実践報告であり、参考に値するものである。

しかし、次の図2の高校教師養成の見取り図で示したように、高校における日本語教育の現場・最前線に存在するニーズを理解することがプロセスの中で、まだ為されていないことがわかった。特に図2の下方にある、「高校での採用試験」と「初期段階の模索期」の二段階が、就職できるか否かの分岐点になる肝要な時期である。これが中等教育の将来の発展に密接な関係があるだけに、注意を払うべき所である。いずれにしても、重要な関係者である高校教師の声に耳を傾け、それをフィードバックできれば、就職の最後の一マイルの達成と社会人としての船出に大いに資することがあろう。



【図2：高校教師養成の見取り図】

#### 4. 方法と内容

拙稿での研究方法は、半構造化インタビューのような質的な調査方法を取る。半構造化インタビューとは、事前に大まかな質問事項を決めておき、回答者の答えによってさらに詳細にたずねていく質的調査法である。調査対象は、できるだけ高校で教授経験のある日本語教師にした。教授経験を強調したのは、壁にぶつかっても途中で投げ出すことなく、ある期間、根気よく落ち着いて働いたことを条件にしたいと考えたからである。ある期間の経験とは、目安として5年間以上のキャリアを持っていることを意味する。5年という勤務年数が教師として安定期に入ったことを表していると判断したためである。

今回は、あわせて9名の高校教師にインタビューを行ったが、その中には、前述した条件に合わない教師が2名いた。1名は特別枠で採用された日本人教師であり、もう1名は勤務年数一年未満の新米教師であった。前者はネイティブ教師の場合、どのような役割を果しているか、立ち向かう課題が同じかを見るために、そして、後者はベテラン教師とどのような差異が存在するか、比較する意味あいでも依頼した。

調査期間は2012年3月から5月中旬までの期間で、教師たちが多忙な故、相手の希望で、場所を決めてもらうことにした。結局、学校以外の場所を指定

した教師は一名のみで、その他は、自分の勤務学校を指定した。教師の学歴は修士5名、大卒4名で、勤務年数は5年から25年が8名で、一年未満の教師が1名である。教師は三つの高校に所属し、桃園県2校、台北市1校である。使用言語は、日本人教師は日本語で行ったが、その他の8名は、台湾の中国語を用いた。表1のようである。

表1：高校教師の学歴と勤務年数

学校	番号	学歴	勤務年数
甲高校	A	大卒	25年
	B	大卒	18年
	C	修士	8年
	D	修士	5年
乙高校	E	修士	7年
	F（日本籍）	大卒	5年
	G	大卒	一年未満
	H	修士	12年
丙高校	I	修士	8年

調査内容は、教案の作成をはじめ、教室活動の中身、活動時間の割合、教授法の習得方法、よく使う方法、教師養成のアドバイス、見通しなどの話題を中心に、以下のような対話内容で進めた。

- 1) 授業時、教案を使いますか。
- 2) 教室活動を如何にアレンジしますか。講義中、導入、練習、応用<sup>10</sup>に使う時間の割合はそれぞれどのくらいですか。
- 3) 教授法は、いつ、どのように身に付けましたか。
- 4) 授業中、よく使用する方法は。
- 5) 効果的な教授法は、何だと思いますか。
- 6) 教師の卵へのアドバイスは、何ですか。
- 7) 日本語教師の養成に関してどう思いますか。
- 8) 職場に入る前に、大学で学べなかったことは何ですか。
- 9) 高校の日本語教育には、どのような展望を持っていますか。

<sup>10</sup> 田中（1988）を参照されたい。

インタビューとは言え、大学の教員が高校の教師にあれこれを質問するため、全員がすぐにインタビューを引き受けてくれたわけではない。何の目的か、まず戸惑いが見られた。また、高校間の競争が極めて高いため、教授法を「企業秘密」だと思っている高校もあれば、訪問の結果が悪かったら、学校の名誉に傷つけてしまいそうだと不安げな学校もあった。真意を打ち明け、誠意をもって、友人の斡旋を動員して、ある期間をおいてその交渉を続けた。学術的な研究が目的で、マイナスの影響を与えることはないと保証し、高校教師たちも事情を上司(主任と校長)に報告し、許可をもらったうえ、インタビューを引き受けてくれたのである。ここで、貴重な時間を割いてご協力くださった関係者各位に厚く御礼を申し上げたい。

## 5. 結果

高校教師の回答を質問ごとに、以下のようにまとめた。

1)Q:授業時、教案を使いますか?

A:まめな教案は、書いてはいないが、「略案」か「ノート」でポイントを記入しておいて、授業に望む場合が多かった。

2)Q: 教室活動を如何にアレンジしますか? 講義中、導入、練習、応用に使う時間の割合はそれぞれどのくらいですか?

A:教室活動については、「まず単語、文型の読みをし、それから文法構造や意味の説明をする。その後、テキストの例文の意味や使い方を説明してから、練習する」といった流れが、教室での主な教授方法である。教室活動の割合は、50 分間の授業時間のうち 30 分を説明に使う教師が 4 名いた。全体的に、説明がメインで、練習と応用の時間が少ないようである。

3)Q:教授法は、いつ、どのように身に付けましたか?

A:教授法はどのように身に付けたかという問いに対して、回答数の多い順番に並べると、「大学や大学院の授業、クラスメートの授業参観、職場の先輩教師の授業参観、教職課程の授業、教職課程の教育実習、教授法の専門書、自己研修、学生時代の学習体験」などであった。前の四種類は、4 名の教師がそれを取り上げているので、重要な学習リソースであ

る。全員、複数以上のルートで教授法のインプットを受け、それを活かしているということであった。

4)Q:授業中、よく使用する方法は？

A:よく利用する方法は、文法の解説を挙げている教師が3名いる。その次は復唱、文型練習、朗読、暗記、間接的な直接法（中国語を混ぜて使う：日<sup>11</sup>）、シャドーイング、口頭発表（文作りの発表）などである。ドリル練習が主である。

5)Q:効果的な教授法は、何だと思いますか？

A:効果的な方法とは、教育メディアの利用、反復練習、シャドーイング、復唱、文型練習、発表（文作りの発表）、テスト、生活と関わる課題、興味を持つ話題の導入、文法の解説、文型の応用練習などである。

6)Q:教師の卵へのアドバイスは、何ですか？

A:教師の卵（大学院生）へのアドバイスは、自分自身の日本語能力（話・聴・読・書の四技能）をしっかりと身に付けること、高校生は日本文化に関心を持っているので、理解しているだけでなく説明ができること、発音は教師の存在感をアピールできる効果があり、努力に値することなどである。その他、文法構造を分かりやすく説明できる能力、板書能力、IT（パソコンを操る）能力、教室の管理能力、アドバイザーとして助言できる能力、なども必要だと述べている。高校の教師として、個人の魅力を持ち、ストレスに耐えられる忍耐力、円満な人間関係、職場で「自分保護」<sup>12</sup>できる能力も必要だと付け加えている。

7)Q:日本語教師の養成に関してどう思いますか。

A:教師養成に関しては、高校の日本語教育に携わるには、国家試験のライセンスが必須である。出題内容は、教育学に関する内容が多く、教職課程で習得できるが、日本語教師としての専門知識と技能は教職課程では学べるものが少ない。そのため、日本語教師に関わる専門知識と技能を学べる専門機関が必要であるという。教師になるハードルは、決して低くはないが、就職できるかどうか大きな問題点である。日本語教師雇

---

<sup>11</sup> (日)は日本人教師の意見。

<sup>12</sup> 例を挙げしていないが、恐らく職場の人間関係を指しているのではなかろうかと思われる。

用の拡大や日本語を大学の受験科目として導入する制度は一步前進しない限り、難しい現状は変わらないであろう。それを意識したうえ、チャレンジ精神を持って臨む必要がある。

8)Q:職場に入る前に、大学で学べなかったことは何ですか?

A:学校で学べなかったことと仕事の困難点は何かという問いに対して、まずN2(2級)とN1(1級)のような中上級の内容になったら、自分の限界を感じる。その指導が難しい。常に自分なりに知識や情報を補っていかねばならない。次は、臨機応変の能力が望まれる。仕事の現場では予期しないことが多い。例えば、生徒がまじめに授業を聞いてくれないときの対策、様々な珍問題、難問題で挑まれた時、うまく対応できる能力などである。それから、タフな神経の持ち主でなければならない。それぞれの高校には、それなりに校風があり、それぞれ規定された基準もある。精神的にも逞しく対応できることを望まれている。クラス経営が難しく神経を使う。生徒の生活上の問題、秩序の管理、クラス間の競争問題、進学相談、進学の問題などがある。そのほか、クラス担当なら、日本語の指導はいうまでもないが、時には、英語やカリキュラムにある計算機概論、商業概論のような科目を指導する場合もある。そのため、その準備もしておかねばならない。

9)Q:高校の日本語教育には、どのような展望を持っていますか。

A:展望としては、政府の政策に期待を寄せる。雇用の拡大に複数の高校が一人の日本語教師を雇う制度を期待する。また12年間の義務教育は、2014年に発足する<sup>13</sup>。日本語教育を重視する特色を出したい高校には、都合がいい。高校の日本語教師は、やはり安定で遣り甲斐のある仕事だと自負している。

## 6. 考察

筆者は、以上の調査結果について、8つの点に分けて考察してみる。

### 1) 教師が習得した教授法の時空から、専門教育の大切さの裏づけができた

まず、高校の教師たちが習得した教授法は、様々な時間と空間(場所)で得

---

<sup>13</sup> 義務教育は高校まで延長する。



られたことが分かった。村岡（1999）の成長段階<sup>14</sup>という概念を参考にし、高校教師がその使用する教授法を獲得したという時空に基づいて、教授能力と関わる時間と空間を表2のようにまとめた。時空は、五つの段階に分けられる。①養成前の学習中の教室、②養成中の教室、③実習中の教室、④職場の教室内、⑤職場の教室外、の五つである。五つの中で、特記すべきは、①と②である。①の養成前とは、日本語を学習している期間という意味を指すが、②の養成中とは、日本語教師養成の知識と技能といった科目を取り入れた時期のことを意味する。

表2：【教授能力と関わる時間と空間】

順番	時間と空間	有益と認めた内容と人数
1	養成前の学習中の教室	教師養成の専門教育を受ける前に、大学で教わった先生に教え方の示唆を受けた。（4人）
2-1	養成中の教室 <sup>15</sup>	専門教育の学習中、学部や大学院で、役立つ知識と技能の学習をした。（4人）
2-2	養成中の教室	専門教育の学習中、教授法演習の授業で教授法を学んだ。（4人）
2-3	養成中の教室	専門教育の学習中、大学院でクラスメートの授業参観をする時、ヒントを得た。（2人）
3	実習中の教室	高校での実習時、指導教師から指導を受けて示唆を得た。（2人）
4	職場の教室内	高校での勤務中、同僚（先輩）の授業参観をしてヒントを得た。（2人）塾の先生からの指導（日）
5	職場の教室外	高校での勤務中、自己研修や教授法の書籍、実践経験などから教授法の知識と技能を学んだ。（4人）

表2で示したように、学校機関において教授法のような実践的な教室での学びは、キャリア形成にとって、重要な意味を持つことが顕著に表れた。例えば、大学院で日本語教師養成のために設けられた、「日本語教育研究」、「日本語学研究」などの専門知識の授業、「日本語教授法の演習」の実技授業、教職課程の「日本語の教材と教授法」といった実技授業などを通して、専門知識を学び、模擬授業をやったり、授業の見学をしたりしながら、互いに教え方の切磋琢磨をして、成長の栄養分を得たという実証が、多く指摘された。教師養成の専門教育の重要性を見逃してはいけない証拠である。

<sup>14</sup> 村岡（1999）P.175。

<sup>15</sup> 養成中の教室とは「大学・大学院」と「教職課程」の両方に跨っている。

## 2) 構造と意味の理解を重視する傾向

インタビューを通して、高校の日本語教育は、構造と意味の理解にウエイトを置く教授法を重視する傾向にあることが伺えた。文法や文型の構造を解説し、文型の復唱、暗記、シャドーイングなどの練習を行い、文型をしっかりと覚えるように、力を入れる教師が多くいた。

## 3) 進学と JLPT の試験に傾く教育目標

筆者は、長年の経験から、高等教育における日本語教育には、常に理想と現実のギャップが存在すると実感しているが、高校にも同じ現象が見られた。職業高校の日本語科は、就職志向ではなく、進学志向である。教育部の統計では、公私立によつては数字が異なるが、平均して7割(私立)から8割(公立)ぐらいの科技大学か総合大学への進学率を持っている<sup>16</sup>。進学の道において、最も自分の実力を客観的、効果的にアピールできるのは、日本語能力試験(以下、JLPT)である。N1を取るのは容易ではないが、N2を取っていれば、進学に大いに役立つ。中国語に、よく耳にする「考試領導教學(教育は試験の方向によって誘導される)」という言葉がある。JLPTの試験のほか、英語能力の検定試験やパソコンの検定なども重要視されている。外部機関で行われる様々な検定は、「教育成果」をPRするのに信頼性が高く、進学にもよい結果に結びついているため、「教育目標」のような錯覚さえも覚える。

## 4) 日常生活と好みの話題が有効な学習法

「有効的な学習法」というとき、新文型を教える際に学習者に文を作らせたり、クラスメートの前で作った文を発表させたりしているという教師が二、三人いた。自分の文を発表させることで、大型クラス全体に緊張感を持たせたり、文型理解を確認したりする効果があるという。また、日常生活と関わる話題に興味を示すので、高校生好みの話題を把握し、シラバスとして取り入れることを工夫すれば、気分転換の効果を持つ一方、学習動機をアップさせるのに、有効な方法でもあるという指摘があった。地味ながら、学習者を重視する趣を匂わせる指導方法で、自作教材を作る方向にも繋がっていくと言えよう。

## 5) 中上級指導の限界

---

<sup>16</sup> 2007年11月19日聯合新聞網による。

<http://www.cer.ntnu.edu.tw/ivan/newsforum/ch11/Detail.asp?TitleID=1385>

高校の現場では、能力試験と進学を重視しているゆえ、初級に止まらず、中上級までのニーズも出てくる。中上級レベルの指導において、体系的に日本語構造や、類似表現の使い分け、日本語の微妙なニュアンスなどが説明できる能力を求められている。日本語教師なら誰でも常に研究の姿勢を持って、取り組んでいかねばならない課題の一つである。

しかし、高校教師の難点の一つは、日ごろの課題を顧みる余裕があまりないことではないかと思われる。JLPT のような重要な試験の前に、土日の休日を返上して生徒の指導をしている現況では、研究もこなすことは困難であろう。一時職場を離れて再教育を受けた方がよかろう。修士課程なり博士課程なりでも行って、専門家の指導の下で、鍛えた方が効果的である。さしあたり、先輩教師の指導を乞うか、旺盛な研究心を持って、自ら問題を解決していくほか方法はなかろう。

## 6) 一般的なキャリア能力の大切さ

一方、高校教師は、専門的なキャリア能力の外に、養成機関に見逃されやすい一般的なキャリア能力を取り上げている。学校機関では、専門知識を学習するのが普通であるため、その他のものを見逃す傾向になりやすい。一般的なキャリア能力は、実践の場でなければ、その重要さと難しさに気付かない。教室経営や人間関係の営みなどは、相当難しい課題であるが、大学院の教壇では、高校の教育に携わる教員がいないため、ニーズが浮かんでこない。教室経営は「教育学程」の一科目だけに止まるだけである。

さらに、職場での人間関係を如何に良好に保つか、責務を与えられた際、それをやり遂げる根性、ストレスに対しての強い忍耐力、カウンセリングの能力等が専門外のキャリア能力として見過ごせない能力である。恐らくこの先、勤務する機関は私立校が普通であり、それぞれの校風や文化があり、「自己保護」<sup>17</sup>をしながら、仕事をやりこなしていくことが大切だと指摘した教師が何人かいた。職場での人間関係の対応の難しさを物語っている。仕事を円満に進めるのに、処世術と心の鍛錬も世渡りする場合、必要な課題かもしれない。

## 7) 現場と養成機関とのギャップ

インタビューにより、現場と養成機関とのギャップが存在していることが浮

---

<sup>17</sup> 実情は控えたが、「自己保護」を強調している教師が3名いる。

き彫りになった。大学院のような養成機関では、教室活動の流れを云々する場合、筆者の場合なら、SOP<sup>18</sup>のように、事前に教案を書いて、「導入、練習、活用（応用か展開）」の三段階をふまえて教えるのが普通である。その上、導入時間はできるだけ短縮して、練習と応用の時間は文型の定着に役立つゆえ、増やす方が効果的だと念を押して指導している<sup>19</sup>。

だが、現場では細かな教案を書く余裕はない。また、文型の意味や語彙などの導入（意味の説明）を時間を割いて行っている。科目の設定が異なるほか、シラバスと指導法も食い違いが生じている。養成機関では、初級の会話教育を目標にして演習授業が行われると思われるが、現場では読本が重点科目になるようである。なお、現場で目指す方向は明らかに進学であり、卒業後、実業界に入るのではなく大学に進学する。そういう方向であれば、JLPT の合格証明書は、有利な条件になり、上位レベルであればあるほど評価される。従って、50 人ぐらいのクラスと母語の使用可能な環境と母語の効率性を活かして、意味と内容の理解、各レベルの試験対策を重視する傾向になり、JLPT 試験に全力疾走したのであろう。

## 8) 仕事の満足感と生き甲斐を持ちながら教師養成への懸念

将来、日本語教師を目指す大学院生や日本語教師の養成機関へのアドバイスは、期待があるものの、不安感を払拭できないような感じがする。「成れなかったらどうしよう」という懸念を抱く教師は決して少数ではない。また、日本語教師とは、単なる日本語を教えるだけの仕事ではない。ちなみに、新米教師は教育よりも事務の負担が重いようである。機関にいる一人の個体として、人間関係に腐心したり、教壇に立つ際、一人の教員として、責務を果たしたりしなければならない。専門的・一般的なキャリア能力も必要とされる。前述したように高校教師になるには、求められる条件也多ければ、ハードルも高い。このような背景に置かれた環境で、最も心配されるのは、やはり就職だという声が多かった。特に少子化の時代において、地域によって、日本語科のクラスが増えるどころか、逆に減少する可能性もあろう。つまり、簡単に教師になれる時代ではないのである。

---

<sup>18</sup> (Standing Operating Procedure) の頭文字で、標準作業の順序という意味である。

<sup>19</sup> 林(2011 b)を参照されたい。

それにもかかわらず、現場教師たちは、大学や大学院の時代に教わった先生に魅せられ、ぜひ日本語教師になりたいという憧れがあって、高校教師になったといったことが話の中から伺えた。その上、文系の卒業生にとっては、教師はとても立派な職業で、安定していて、遣り甲斐のある仕事だとポジティブに見ている。長年にわたって、多くの生徒を日本語教育を通して、立派に育てられたという事実からも、日本語教師という仕事に対する満足感や、生き甲斐、自負を持っていることが伝わってくる。

## 7. フィードバックと提言

以上の8点の考察を基に、反省の気持ちをこめ、大学院の教師養成教育にフィードバックする項目を7点取り上げ、提言をしたい。

### 1) 演習授業での教授法のインプットを強化

調査では、第2段階の養成中の影響が多く取り上げられた。教育の質を上げるには、教授法の知識や技能の両側面に対して、更に充実した内容を考慮せねばならない。中途半端な教師養成ではすでにこれから先の時代に生き残ることができない。特に演習授業のような実務系統のインプットをもっと充実するように強化すべきである。

### 2) 日本語の構造と意味の教育を強化

ニーズを大事にするなら、日本語の構造と意味の教育を一層強化する必要があるだろう。研究にも流行があるような気がする。80年代において、筆者が日本へ留学に行った頃、寺村秀夫先生の構造論という講義で勉強したことがあるが、当時は対照研究が盛んだった時期である。帰国後、教わったものが現場の教育に資することが多かった。だが、シンタクスと意味の教育を重視する大学院は今廃れつつある。若い研究者も文法離れの傾向を呈している。教師養成の場合は、一時の流行りに飛びつくよりも、現場のニーズをとらえ、コース・デザインを見直して目的のある選択をすることが重要であろう。構造と意味に関する教育と指導を怠ることのないように、呼びかけたいものである。

### 3) 院生の日本語力を強化

日本語のコミュニケーション能力をアップさせることは、永遠の課題である。ある教師が指摘したように、発音や会話能力などがしっかりしていれば、生徒

から篤い信頼を得られるという。さもないければ、逆方向に走り、悪循環になりがちである。大学院の教師養成教育を行うと同時に日本語力の向上を図るべきである。大学院のカリキュラムにも院生の日本語力を向上させる教育が期待されているかもしれない。

#### 4) JLPT の理解と指導の強化

台湾籍の教師 8 人が全員、1 級か N1 の合格証明書を持っている。しかし、それに合格したからといって、その内容を学習者に上手く教えられるわけではない。インタビューでは、教えるとしたら N2 の内容が限界だと何人かの教師が言っている。中上級の文型、語彙、表現、読解、聴解などの内容は学術的な研究と分析が望ましい。よって、大学院において、JLPT の内容の研究と指導を前向きに進めても差し支えない。これも構造と意味の強化に繋がって行くものと思われる。

#### 5) 応用段階の理解と強化

説明と理解の所で止まっているのは、一拍子抜けているような感じがする。教室活動と言え、構造と意味を分らせる導入、文型の形を覚えさせる練習、覚えた文型を使わせる運用といった三段階が備わらなければならない。応用段階まで一歩踏み込みできないのは、様々な原因があろう。クラスの規模の大きさ、外国語教授法の知識不足、日本語教師という専門職に対する誤解<sup>20</sup>などに起因しているのではなかろうかと思われる。教室活動における導入、練習、応用の三段階は、言語教育理論の示唆によるものである。導入と練習は、ソシュールのラング (langue)、チョムスキーの言語能力 (competence: コンピテンス)、木村宗男の規範としての言語能力を指しているのに対して、応用とは、ソシュールのパロール (parole)、チョムスキーの運用能力 (performance: パフォーマンス)、木村宗男の運用としての言語能力に当たると考えてよかろう<sup>21</sup>。応用の段階は、会話能力を向上させ、習ったものを活かし、外国語を以って発信できる能力を高めるのが狙いである。学習者に聞けば、誰でも会話能力を優先的に身に付けたいと答えるであろう。今後は高校の日本語教育でも会話力のアップに役立つ応用段階の認識と練習活動の充実を図り、ニーズに応えるべきだと言

<sup>20</sup> 日本語ができれば、日本語を教えられるということを指している。

<sup>21</sup> 詳しくは林(2011a)を参照されたい。

いたい。

## 6) 大学院と高校との連携を強化

教師養成を机上の空論にしたくなければ、高校での実習活動を前向きに取り入れるべきである。実際の教壇に立ち、学習者の様々な挑戦に対して、どうやって臨機応変に対応していくか、現場が最も相応しく厳しい修練場である。筆者の勤務している大学院は、所在地の高校と密接な関係を持ち、高校の日本語教室を常にサポートする体制をとっている。相手の希望に従い、教員を混じえながら、院生を投入している。それにより、院生が自分の不足点に気付き、やる気が沸き、プラス方向に成長していく姿が見られた。このような連携制度が発足できた鍵は、実は大学院側にある。制度的には大学や大学院が高校機関の上にあるからである<sup>22</sup>。したがって、大学院には、連携に対する積極さ、誠意と行動力が必要だと思われる。一方、連携によって、現場に新たな教授法のインプットが可能になる。高校と養成機関の間に、さらなる対話や協働、連携が生まれることが待たれる。

## 7) 一般的なキャリア能力を強化

大学院は学術志向の機関で、一般的なキャリア能力の重要さが見逃されやすい。しかし、時世は実務能力も重視される時代であり、コミュニケーション能力、求心力、チームワーク、マナー、明るい性格、笑顔などが、高校の教師にも求められている。日本語教師は生き甲斐を感じられる仕事で、職場の人間関係や、同僚間とのコミュニケーションをうまく取れる人間が無難に教師の仕事をこなしていくと予測する。

それに、教師は日本語学科の出身者にとっては、理想的な仕事の一つである。なかなか教師になれない時代なので、リスクが若干伴っても仕方がないが、執念深く、挫けずに不安感を乗り越える努力をし、チャンレンジ精神を持って挑戦してみようという決心が必要であろう。

## 8. 終わりに

教室は「ブラックボックス」のようなものだとよく言われ、教師 VS 学習者だけの空間になる。外部の圧力がなければ、自らそれを公開することもなければ、必要もない。それゆえ、教室内で、何十年立っても千遍一律のやり方で授

---

<sup>22</sup> 教育部は高校の教育評価に当たり、大学の教員にその責任を与えている。

業を行っている教師が実在する。学習者である学生は、教室という空間の中で、よい教師に巡り合えれば、生涯に恵まれる場合があるが、相反した場合、学習の挫折者や犠牲者になり易い。

今回のインタビューで一つの事実が明らかになった。教師養成のプロセスの中で、ブラックボックスを公開することは、将来の成長や教授法の改善に有益であるという裏づけができたことである。先輩や同僚、クラスメートなどがお互いに教室を公開しあい、授業参観しあうことが、気付きや見直しのきっかけとなったと評価している教師が多くいるからである。

事実として、訪問校の中で、ある高校が前向きに「先輩の授業指導」といった制度を取り入れ、教授法の改善を試みているという。他校にも類似したシステムの実施を望んでやまない。なお、インタビューで、新米教師が「経験の浅い日本語教師の勉強会」を作ることなどを提言している。学校の垣根を越えて、人間関係の配慮が要らず、リラックスした雰囲気、教育に関心を持つ教師が集まり、教授法の討論をはじめ、悩み相談やその他の意見交換の場があれば、教育に役立つのではなかろうかという意見が印象に残った。

調査結果から、大学院の演習授業の見直しが必要であることが分かった。教育機関のラストマイルとして、教授法もさることながら、寺村秀夫氏の主張した日本語教育のための対照研究（日中両言語）、日本語の構造（シンタクス）と意味の研究と学習などにもっと力を入れるべきだという反省があった。また、一人の職業人としてキャリア能力も同時に身に付けるべきだと思われるが、キャリア能力の養成は、実践の中から学んでいくものなので、大学院と高校現場との協働や連携をもっと進める必要がある。

学部や大学院の教育では、「Learning by Doing」が大切である。インターンシップの制度を取り入れ、日本語教師の卵たちを養成期間中、高校の教育現場に送り、実戦経験や教室経営、人間関係などを積み重ねることも有益でかつ必要だと思う。様々な課題にであった時、紐を如何に自分の力で解いていくかの鍛錬もしみじみその必要性を感じた。最後に、拙稿の調査が少しでも高校の日本語教育の理解や発展の一助になれば望外の喜びである。



## 参考文献

- 顔幸月・渡部倫子・小林明子・縫部義憲（2007）「台湾の大学生が求める日本語教師の行動特性」『日本語教育』133号、pp. 67－76
- 木村宗男（1988）『教授法入門』国際交流基金 凡人社
- 蔡茂豊（1985）「台湾における日本語教育」『日本語学』1985年7月号
- 佐藤貴仁（2010）『2009年度台湾における日本語教育事情調査報告書』交流協会
- 田中望（1988）『日本語教育の方法ーコースデザインの実際』大修館
- 陳淑娟（1993）「日本語教授法コースにおける教壇実習の一考察ー1991学年度東呉大学日本語学科の実践例から」『台湾日本語文学報』第4号 pp. 11-31
- 中川良雄（2004）『秘伝日本語教育実習～プロの技～』凡人社
- 林大代表（1990）『日本語教育ハンドブック』大修館
- 村岡英裕（1999）『日本語教師の方法論ー教室談話分析と教授ストラテジー』凡人社
- 由井紀久子（2010）「プロフィシェンシーとして捉える日本語教育能力：試論」『無差』第17号 pp. 55－76
- 頼錦雀（2011）「台湾における日本語教師養成ー東呉大学の事例を中心に」『東呉日語教育学報』36号 pp. 53－75
- 林長河（1994）『第2外国語としての日本語教育の問題点と改革』致良出版
- 林長河（2011a）「台湾における日本語専攻の大学院の日本語教師養成に関する一考察ー日本語教育の学術領域とカリキュラムをめぐってー」『台湾日語教育学報』17号 pp. 57－86
- 林長河（2011b）「日本語教師養成のための演習授業の試みー銘傳大学の修士課程を例にー」『2011年度「台湾日語教育研究」國際學術研討會論文集』靜宜大學日本語文學系、台灣日語教育學會 2011年11月26日 pp. C2-1-8

後記：拙稿は国科会の助成によって行われたプロジェクトの一部であり、テーマ番号は NSC100-2410-H-130-048-である。

# 付錄 1

## 銘傳大學中等學校教師師資職前教育課程教育專業課程科目及學分一覽表

101 年 3 月 19 日教育部臺中(二)字第 1010045201 號函同意核定

101 年 5 月 3 日教務會議修正通過

101 年 6 月 5 日教育部臺中(二)字第 1010100935 號函同意核定

分類	科目名稱	學分	第一年		第二年		修讀說明
			上	下	上	下	
教育基礎課程	教育心理學	2	2				至少應選修 2 科，共 4 學分。
	教育概論	2	2				
	教育社會學	2	2				
	教育哲學	2	2				
教育方法學課程	教學原理	2		2			1. 「教學原理」為「分科/分領域/分群教材教法」之先修課程 2. 至少應選修 3 科，共 6 學分。
	輔導原理與實務	2		2			
	課程發展與設計	2		2			
	班級經營	2		2			
	教育測驗與評量	2			2		
	教學媒體與操作	2			2		
教學實習及教材教法課程	分科/分領域/分群教材教法	2			2		1. 「教學原理」為「分科/分領域/分群教材教法」之先修課程，「分科/分領域/分群教材教法」為「分科/分領域/分群教學實習」之先修課程。 2. 教育實習、教師資格檢定科目應與教材教法、教學實習之科目相同。
	分科/分領域/分群教學實習	2				2	
選修課程	青少年心理學	2			2		1. 「選修課程」至少應修習 12 學分，「教育基礎課程」及「教育方法學課程」起修科目學分，得採計為「選修課程」科目學分數計算。 2. 每學期實際開設選修課程，以當學期中等學校教育學程課程時間表為準。
	特殊教育導論	3				3	
	教育制度與法令	2				2	
	生命教育	2			2		
	人際關係與溝通	2	2				
	教師專業發展	2				2	
	品德教育	2	2				
	教育人類學	2	2				
	現代教育思潮	2		2			
	教育倫理學	2			2		
	教育史	2				2	
	性別教育	2				2	
	多元文化教育	2				2	
	網路教學與課程設計	2			2		
	教育統計	2			2		
	行動研究	2				2	
	行為改變技術	2			2		
	閱讀理解策略	2				2	
	活化教學方案設計	2			2		
	多元評量設計	2				2	
	補救教學實務	2			2		
	適性輔導方案設計	2			2		
結業總學分	專業必修學分	14					
	至少應選修學分	12					
	合計	26					

## 付錄 2

銘傳大學培育中等學校各任教學科師資職前教育專門課程  
科目及學分一覽表

任教科別		高級中等學校第二外語-日語科				
要求總學分數		50	必備學分數	36	選備學分數	14
適合修讀之相關學系、研究所(含輔系)		應用日語學系、應用日語學系碩士班				
類型	科目名稱		相似科目名稱	學分數	備註	
必備科目	初級日語讀本			3	必備科目  36學分	
	中級日語讀本(1)		中級日語讀本(2)	3		
	高級日語讀本(1)			2		
	高級日語讀本(2)			2		
	日語語法(一)			2		
	日語語法(2)		日語語法(3)	2		
	日語句型(2)		日語句型(3)	2		
	日語會話(3)(4)			4		
	日語會話(5)(6)			4		
	日語聽力訓練(1)(2)			4		
	日語聽力訓練(3)(4)			4		
	日語習作(1)(2)			4		
	小計			36		
選備科目	日本文化概論(1)		日本文化概論(2)	2	就左列 選備科目 至少 修習 14 學分	
	日本文學概論(1)		日本文學概論(2)	2		
	日本名著選讀(1)		日本名著選讀(2)	2		
	日本童話選讀			2		
	日本歷史			2		
	日本地理			2		
	日本經濟(1)		日本經濟(2)	2		
	新聞日語(1)		新聞日語(2)	2		
	日語應用文與商業書信(1)		日語應用文與商業書信(2)	2		
	商用日語會話(1)		商用日語會話(2)	2		
	日語翻譯(1)		日語翻譯(2)(3)	2		
	語言學概論(1)		語言學概論(2)	2		
	英日對譯理論與實務(一)(二)			2		
專業日語翻譯(一)		專業日語翻譯(二)	2			
小計			28			
說明						
1. 本表應修必備科目 36 學分，選備科目 14 學分，共計至少 50 學分。						
2. 擁有「日本語能力檢定試驗」1 級合格者，可免修習必備科目「會話(3)(4)」4 學分。						
3. 擁有「日本語能力檢定試驗」2 級合格者，可免修習選備科目「日語聽力練習(1)(2)」4 學分。						
4. 本任教科別之科目、學分由應用日語學系制訂、審核。						

### 付錄 3

#### 銘傳大學培育中等學校各任教學科師資職前教育專門課程

##### 科目及學分一覽表

任教科別		高級中等學校職業群科外語群—應用外語科日文組					
要求總學分數		26	必備學分數		9	選備學分數	17
適合修讀之相關學系、研究所(含輔系)		應用日語學系、應用日語學系碩士班					
類型	科目名稱		相似科目名稱		學分數	備註	
必備科目	日語會話(3)		日語會話(4)(5)(6)(7)(8)		3	必備科目 9 學分	
	日語翻譯(1)(2)		日語翻譯(3)(4)、日語翻譯(一)(二)、日語口譯(一)(二)		3		
	日語習作(1)(2)		日語習作(3)(4)		3		
	小計				9		
選備科目	高級日語讀本(1)(2)				4	就左列選 備科目至 少修習 17 學分	
	日語語法(一)		日語語法(2)(3)		2		
	日語應用文與商業書信(1)(2)				4		
	日語聽力訓練(1)(2)		日語聽力訓練(3)(4)		4		
	日本文化概論(1)		日本文化概論(2)		2		
	觀光日語會話				2		
	新聞日語(1)		新聞日語(2)		2		
	日本名著選讀(1)		日本名著選讀(2)、日本文學概論(1)(2)		2		
	日本歷史				2		
	日語教學法(1)		日語教學法(2)、日語教育學概論(1)(2)		2		
	日文文書處理與網際網路				2		
	日本地理		日本旅遊概論		2		
	日語發音(1)		日語發音(2)		2		
	專題研究				2		
	日本經濟(1)		日本經濟(2)		2		
小計				36			
說明							
1. 本表應修必備科目 9 學分，選備科目 17 學分，共計至少 26 學分。							
2. 擁有「日本語能力檢定試驗」1 級合格者，可免修習必備科目「日語會話(3)」3 學分。							
3. 擁有「日本語能力檢定試驗」2 級合格者，可免修習選備科目「日語聽力練習(1)(2)」4 學分。							
4. 本任教科別之科目、學分由應用日語學系制訂、審核。							